

5

総合討論

○水野 それではご参加の皆様からの質問をもとに総合討論を行いたいと思います。Zoomのオープンチャットと、匿名でも送信できるsli.doの両方に質問をいただいておりますが、まずはお名前を出しての質問を優先させていただきます¹。

○質問者1 ガンディーはどこまでリアリストだったのでしょうか？ 大衆を惹きつけた彼の語りには、周囲を意識し、伝わりやすいように工夫を凝らした「戦略的な」語りの魅力があったと思うのですが、それは、「(彼が自己と対話して生まれた) 自然な」語りの崇高さと矛盾するようにも思います。

○井坂 なかなか難しいところですが、おそらく彼自身としては、伝わりやすいように工夫することが、語りそのものを「戦略的」なものにするとは、必ずしも考えていなかっただろうと思います。彼は「内なるもの(神)の声」といった表現も使っていますが、そのときどきに自分が「真理」であると考えたことを語り、実行する、という姿勢を示しています。ただ実際には、語りの内容や形態は対話の中で形成されていくものでもあり、周囲とのつながりのなかでつくられ、変容しうるものでもありました。その意味では現実を踏まえたものになっている、といえるかもしれません。

彼の考えでは、「真理」にたどりつくにはいろいろな道筋があるけれども、「真理」そのものはかなり普遍的なものとして、人々が共有しうるものとしてとらえられていて、そのような「真理」に対話を通じて近づこうとする試み、そしてその過程を伝えようという試みの中で、いろいろな語り方がでてくる、ということかと思っています。

○質問者1 ありがとうございます。教科書などで語られるガンディーは真っ白で純粋で清廉な人というイメージがあって、道徳的な人、美徳の人として語られています。しかし、(たしか『ガンジー』というタイトルだったと思うの

¹ 本ブックレット掲載にあたってはすべて匿名とした。

ですが) ガーンディーの映画を観たら、イギリスのBBCなどのメディアをうまく使って自分の考えを国際的に広めるといった戦略をとっていました。キング牧師も同じようにメディアを巧みに使って権力に戦略的に立ち向かっていたということを知って、もしかしたらガーンディーも戦略家としての側面もあったのではと気になって、質問させていただきました。

○井坂 重要な観点で、いろいろと議論できるころだと思えます。ガーンディーは、自身の考えや「実験」の過程を伝えるにあたって、様々な方法を用いています。彼は西洋近代文明を批判した人物として評されることも多々ありますが、しかしご指摘のように、たとえば新聞をはじめ、出版技術、メディアを大いに利用しているなどの側面もあります。そのときどきの状況にあわせて、異なる伝達方法を組み合わせていて、たとえば広く民衆に発信するという観点では、歩く、祈るなどの行為が重要な役割を果たしますし、エリート層やイギリスその他の海外の地域へ発信するときにはメディアが大きな役割を果たしていました。

ただ、そこで何を語るかというところにおいては、「今、これを言う(政治的に)有利になるからこれを言うべきだ」と戦略的に考えていたというよりは、彼自身が「真理」の探究のなかで考え、判断したり決断したりしたことを語る、というように、彼自身は思っていた節があります。我々や他の人々から見てどう見えるかという、また違う話になるかもしれませんが。

「守る」ということ

○質問者2 本日は素晴らしいご講義をありがとうございました。私は国連平和維持活動に政務部門の文民として長く従事しておりまして、松方先生の「守る人＝戦う人」というご指摘に関し、各国軍が他国の平和維持のために共同して携わるといふ20世紀後半の人類の試みは、まさに戦う人が守る人に化する歴史の新しい事例だったのではと思っております。松方先生はどのようにお考えでしょうか。

○水野 松方先生が本セミナーの冒頭でおっしゃった「守る人」のニュアンスとは少しずれがあるかもしれませんが、いかがでしょうか？

○松方 ここで私は、「戦う」も「守る」もニュートラルなものであるととらえています。ただ、「戦う」のほうは誰が聞いても比較的ニュートラルな言葉であるのに対して、「守る」はプラスの価値を持つ言葉だと思います。ゆえに、「守る」

と言った瞬間に権力になる、という側面がある。つまり、「語り方」の問題だと思えます。

自分たちとしては「守る」は絶対にプラスの価値であると思いたいし、自分たちは守る人たち（の一部）でありたい。だから、自分たちは（戦ったのではなく）「守ったのだ」と語るわけです。

もちろん誰でも、守ってくれる人がいたらうれしいし、自分が守りたいものもある。だから「守った」という語りを否定するわけではまったくありません。ただし、「守る」という語りを受け取る側は、常にクエスチョンマークを付けて聞くのがいいのではないかと考えています。

聴衆受けがいい演説

○質問者3 今年のうちに行われる衆議院選挙を踏まえ、昨今の政治家によるポピュリズムを意識した演説（聴衆受けが良い演説）の善悪についてどう思われますか。チャーチルの演説は「聴衆受けが良い演説」だったといえると思いますが。

○後藤 語ることについて考え始めたのはこのプロジェクトに参加してからなので、これが正解ということではなく、ご質問をいただいて今考えたことを申し上げます。

先ほどご紹介したチャーチルの演説は戦争中のものなので、どうしてもある程度はプロパガンダ的な要素が入り込みます。1940年のあの段階で、「我々はどうにも負けそうだ」とは口にはできない状況にあったらろうと思います。だからチャーチルは「we shall never surrender.」と、人々が聞きたかったことを言っている。

しかしながら、チャーチルはポピュリストとは違うと思います。イギリス人にとって「ダンケルクの撤退」は、非常に苦しい状況です。イギリスが大陸に出て行ってフランスと共に戦おうとしていたのに、イギリスだけ逃げてきた。以後、フランスからは「イギリスがフランスを置いて逃げていった日」と記憶されてしまった時です。

ポピュリストというと、自分たちだけが正しいとして事実から完全にずれたことを話す人も多いわけですが、チャーチルはこの演説やその後の演説で、最悪の事態が起きたという事実は事実として語った上で、でも、やはり「we shall never surrender.」だと訴えている。それはポピュリストによる、いかなる政治的責任も負わずに煽るだけの言葉とは違うものではないかと私は考えていますが、どうでしょうか。

また、選挙演説などだと一方的に演説して聴衆が歓声を上げて終わり、という語りになりがちですが、一般的なイギリスの議会における演説では、他の人から厳しい反論が戻ってくるので、そこから言葉と言葉で激しく戦います。その議論によって「語る」、そして「戦う」わけです。反論に対して、その場で考えて言葉を返さなければならない。となると、事実からあまりにずれた空虚なことだけをずっと言い続けるのはかなり難しいのではないかと考えています。

沈黙の力

○質問者 4 言葉や語りには確かに力がありますが、「言、事を展^のぶること無く語、機に投ぜず」というように、限界があることも確かであると思いますが、いかがでしょうか？

○水野 引用された言葉は『無門関^{むもんかん}』²の一節で、「語られた言葉で心の真実を具現するのは限界があるだろう」という考えのこのようです。松方先生以外の3名が本日紹介した歴史上の人物（福澤・チャーチル・ガンディー）は、言論の力を信用し、それで戦ってきていると思うのですが、いかがでしょうか。

○後藤 直前の研究会で、このオープンセミナーの準備として様々な議論をしたのですが、その時の話をここで少し紹介します。

私を取り上げたイギリスでは、（一方的な演説だけでなく「議論で語る」ことも含めて）語るという行為がかなり重視されます。けれども、例えば水野さんが今日ご発表されたように、日本では、「語ること」と「人々の信頼を得る（権力）」の結びつきについての考え方が違うようにも見えます。つまり、言葉にすごく重点が置かれている文化とそうでない文化があるのではないか、という話がありました。これを単純に「日本特有の文化」で終わらせてしまっただけではいけないだろうと思います。

○水野 もしかしたら儒教文化圏に共通することかもしれませんね。論語にも「あまりしゃべり過ぎるな」といったことが書いてありますし。

実際、中国でも特に前近代で名文と言われるものは、口頭で述べられたものを書き留めた、あるいは口頭で述べるために書かれたものよりも、圧倒的に、まず文章として読まれるべく書かれたものが多いと思います。そもそも中国も日本

2 中国宋代に無門慧開が著した禅宗の公案集。

も、語ることによって、つまりパブリックスピーチによって権力を得るという伝統はおそらくないのではないのでしょうか。それで、演説が定着しなかったのではないか。

最近の習近平の演説（2021年7月1日に行われた中国共産党創立100周年の式典における）も、人の心を動かすためのパブリックスピーチというよりは、既に決まっていることをとうとうとしゃべっているだけで、レトリックの強さや威勢の良さという面はあるものの、私としては日本の演説文化との本質的な違いはあまり感じませんでした。

○後藤 井坂さんのガンディーのお話からも、もしかしたらインドも、人々の信頼を得るための基となるものが「語ること」とは限らないのではないかと思います。語らなくても、「この人は必ず何かしてくれる」という印象を与えることが重要だったりするのではないのでしょうか。

○井坂 たしかに、ガンディーに限って言えば、彼は言葉だけではなく、「語る」と「実践する、実験をする」こととをあわせて考えていました。少なくとも自分ではそうしようと思っていたと思います。（ちなみにガンディーは、思考のために必要であるとして、週1日ほど沈黙の日を設けていました。）

ガンディーをみるとときには、断食にしても祈りにしても、言葉を使う語りではない語り方があったことを考える必要があるだろうと思います。

○後藤 一方でチャーチルはまさに「語る人」でした。しかし、首相になるときだけは、黙ったのです。

当時、首相候補にはチャーチル以外に外務大臣を務めていたハリファクス³という人がいて、多くの人がハリファクスのほうがいいのではないかと考えていました。

いよいよチャーチルとハリファクスが前任の首相のネヴィル・チェンバレンに会うことになったとき、いつもよくしゃべるチャーチルに友人がアドバイスをしました。その友人はチャーチルに、「ハリファクスについて尋ねられたらとにかくしゃべるな」と言っておいたのです。そのため、チャーチルは「ハリファクスのもとで政府に参加するか」と問われて黙りました。長い沈黙の時間が流れた後、

3 元々の名前はエドワード・ウッドだが、貴族の家に生まれ、爵位を受け継ぐことで名前が変化していった。1926年から31年には、アーウィン男爵としてインド総督を務め、ガンディーと対峙する立場にあった。1934年、父の死によりハリファクス子爵（最終的には伯爵）。1938年から40年、チェンバレン内閣の外務大臣。1940年から46年、駐米大使。

ハリファクスが、自分は貴族院に属する議員だから首相にふさわしくないと行って下りた。こうして、相手が下りてくれたことによってチャーチルが首相になることが決まったのです。

○**松方** 今の日本に引き寄せて考えると、最近の菅総理の会見については、皆さんどう思われますか？

私は、いわゆる官僚答弁も一種の「黙る力」ではないかと思っています。何かを言っているふりはしているけれども、実は何も語ってない。絶対に尻尾をつかませないように言うので、結局、何を言っているかわからない。機能としては「黙殺」と同じ役割を果たしているのではないのでしょうか。

○**参加者コメント** あの会見は「黙る力」そのものだと思います。

「先生」という権力

○**質問者5** 学者・研究者もある意味では権力者だと思いますが、もし先生方に自分の「語り方」について何らかの試行錯誤やお考えがあれば、教えてください。

○**水野** 学生からしてみれば学者や研究者も、ある意味では権力者ですね。「単位を与える（与えない）権利」を持っていますし。

○**松方** 私はゼミなどで自分の意見をどんどん言うてしまうほうなんです。今日の冒頭の発表もそうでしたが、自分の立ち位置を最初に明らかにする。ただ、それが絶対的な意見だと思っているわけではなく、いつも「こういう意見もありますよ」というスタンスです。

それでも私はちょっと言い過ぎかもしれないと思っていたので、ある学生さんから、私はあまり学生の意見に介入しないところがいいと言われたときには意外に感じました。

ならばどういった教員の発言を介入と感じるのか、と聞いたら、「じーっと黙って聞いていて、最後にダメ出しする先生」だということです。私が推測するに、その先生はあまり自分が話しすぎてはいけなくて自制していたのだと思いますが、学生さんからするとむしろ、後からダメと言われるほうが介入と感じられたのでしょう。

ですから、自分がどう語るか以上に、相手が発言したときのリアクションが重要なのではないかと思います。それが否定的に見える、みんな黙ってしまう。

やはり、「その場は対話の場である」という前提で語れば、いい結果になるのではと勝手にしています。

○井坂 私は話すのがあまり得意ではなくて、授業が終わってから、「ああ、失敗したな」とか、「違う表現を使えばよかった」などと落ち込むこともままあるのですが、今はできるだけ正直に、わからないことはわからないと伝えて、最終的な結論ではなくまだ考えている途中であることを伝えるのがよいのかな、と思っています。それから、いろいろな考え方があることをできるだけ紹介していくように試みています。ただその結果として、授業が終わったときに、学生さんからすると、私が何を言いたかったのかよくわからなかった、結論がなかった、ということになってしまうかもしれませんが。

特にガンディーの影響、というわけでもないと思うのですが、自分自身が年齢を重ねる中で、いま自分がこうして話していることは結論ではなく思考の過程であること、まだ変わりうるものでもあること、そうした試行錯誤自体を語ってもいいのでは、と感じるようになりました。

女性と男性の語り、平時と戦時の語り

○松方 以下の2つの質問についてはどうでしょうか。

○質問者6 コロナ禍において女性指導者の語りが注目を集めました。いままでの男性指導者の語りとの大きな違いはなんでしょうか？

○質問者7 チャーチルやガンディーの語りを戦時（第2次世界大戦、独立運動）の語りだとすると、平時における「語る力」の特徴は何かあるか、戦時との違いはあるか、についてお考えをうかがいたいです。（戦時には語られる側と語る側の目標が共有されている一方で、平時には多数の目標が並立するように思っています。）

○後藤 平時と戦時では必要とされる語りが異なるだろうと思います。

松方さんが最初に発表されたお話の出発点は、人は語りによってどうやって偉くなるかということでした。そして現実として、（特に日本の政界では）今まで偉くなった人には、男の人が多かった。国や文化によってその人たちがどの程度語ってきたかには違いがあるとしても。

そうした男性たちが力を得ていくプロセスで必要とされていた語るべきポイン

トや語るべき方法と、それまでと全然違う「新型コロナウイルスのパンデミック」という新たな事態が起こったときに、語りに必要とされるポイント、あるいは必要とされる語り方がちょっとずれたのではないかという気が私はしています。だから、それまでとはちょっと違う人たちが力を得ていく可能性がある。

これまでの平時と戦時についても同じことが起きてきたと思います。平時においての語りによって力を得た人が、戦時においては全く力を発揮できないということですね⁴。

○松方 男性と女性で比較すると、女性のほうがどちらかというと、語りにおいて「目的を達成する」ことよりは「対話性（コミュニケーション）を重視する」、「一体感を醸成しようとする」傾向が強いかもしれないと思っています。

なぜそう思うかという、これは研究会でも話したことです。ニュージーランドのアーダーン首相が国民と対話をする企画で、イヤリングについて聞かれ、「これ、金属に見えるけど木製なのよ」と答えたのが実に印象的だったのです。

イヤリングが金属製でも木製でも、たいした問題ではないはず。でもたぶん、このイベントを始める前に、彼女は「私はあなたの質問には必ず答えます、国民のどんな質問でも答えます」と言ったのではないかと思います。その言葉を実行している、ということパフォーマンスで示している。

すなわち、それは語りのように見えて、実はガンディーのように「態度で示す」ものでもあった。言葉の内容よりも、その態度がおそらく国民に安心感を与えるのだらうと思いました。

同じようなことを男性がするだろうか？ わからないなと思います⁵。

○井坂 ガンディーはある時期から、女性的なものを称揚し、男性の中にも女性性を育てるといった考えも出しています。ある意味では、性の境界を超えようとしているようにもみえます。しかしその一方で、女性的なものとは何かを規定

4 この一つの例としては、20世紀初頭に自由党内閣を率いて多くの改革を行ったが、第一次世界大戦途中で首相を交代せざるを得なくなったハーバート・アスキスが考えられよう。

5 戦時と平時については、その場では答えられなかったので補足。いつが戦時でいつが平時かについては、意見がわかれるように思う。2021年7月9日現在は、戦時か平時か。コロナ禍だから戦時だと思う人と、平時だと思う人がいそうである。始まろうとしている東京オリンピック・パラリンピックは、意図的に「戦時」を作り出すものでもあると思う。質問者の意見にあったように、「戦時には語られる側と語る側の目標が共有され」と認識されているため、目標が共有されることを目的に、意図的に「戦時」を作り出そうという人が出てくる、というのが私の意見である。今回は、意図的に作り出した「戦時」にコロナ禍という予期せざる「戦時」が重なって、2正面作戦を戦わねばならなくなってしまったように思われる。【松方】

している点では、やはり性の境界、男性らしさや女性らしさの観念を前提としていた、といえるかもしれません。

それから平時と戦時の語り、という点ですが、ガンディーの場合には、生活のあり方、社会のあり方、政治のあり方が全てつながっているという発想があるので、どういう状況にあってもあらゆる側面について考え、語らなければならず、実際にいつもあらゆる方面の話をしていたように思います。もちろん、状況にあわせて具体的なテーマや強調点は変わりますが、個人の内面、日常生活、社会、政治、すべてが彼にとっては相互につながっていて、常に重要であった、ということかと思います。

「語り」は国境を超えるか？

○質問者8 セミナーの冒頭で「2021年の東京を共有する」という前提が出されましたが、もしあえて国境を超える「語り」を目指した場合は、また別の条件が必要でしょうか？ 必要だとすれば、それはどのような条件でしょうか？

○松方 私は、「語り」は国境を超えられると信じています。この場が日本である必要はないし、参加者が日本人である必要もない。今、この場はたまたま日本人の方が多いですが、たぶん多国籍の人々との議論でも、たとえば国際会議の場などでも成り立つだろうと思っています。

時間と場所のマトリックスから自由になることによって、特定の位置付けから自由になることができるのではないかと思います。

ただ、国境を超えるためのグローバル・ヒストリーという、「地球市民」「地球に生きる人々」のような大きなアイデンティティを確立しようという方向を想定しがちです。私が考えているのはむしろ逆で、方向性としては、個人による、個人のための歴史という方向性を模索しています。個人が自分の意思で、つながりたい人とつながる。その過程で、もちろん国境を超えることも可能であると思っています。

東京大学前総長の五神真さんは「大学最大のライバルはYouTube」と言っていました。それは正しいと私は思います。今後、AIによって様々な職業のプレゼンスが小さくなっていくと、専門的な職業人を養成する場所としての大学のプレゼンスは下がっていくと思うのです。

かつてブルーカラーがそうだったように、いわゆるホワイトカラーの職業がなくなっていくとどうなるか。まだ起きていないことですし、想像するのは容易ではありませんが、もしかしたら、人々が今よりもうちょっと暇になる、という将

来もありえるでしょう。お金もないけど、みんながエッセンシャルワーカーで、食べていけないわけでもない。そして、今より暇になる。

そうなったときに、人々の知的好奇心に応えるのは今の大学のような存在ではなく、YouTubeやそれに類するものではないかと思うのです。4年間、大学に拘束される形ではなく、見たいときに見たいものを見るという形ですね。

そのとき、その人たちにどういう語りが求められるのか。「みんなで豊かになる」でもないし、「どうやって国家が生き延びるのか」でもないような気がします。「みんな」「国家」というような集団はもうイメージしにくいのではないか。そうなったら、個人の、個人による、個人のための語りが良いのではないかと思っています。「◎◎を実現したかったら、△△しましょう。」みたいな語りです。

ただ、歴史は未来を語るものではない。だから、歴史が言えるのは、「△△した人の歴史」だろう。「△△した人が、◎◎を実現したことがある。」「△△した人が、○○となってしまうことがある。」というような経験を並べることができないか。

△△や◎◎や○○の材料はなるべく世界中から、古いところからも、新しいところからも、場合によっては文学や映画からも集めてきて、今までの人間の経験蓄積を個人の次の行動に生かせるようなものをちょっと考えてみよう、この企画研究を立ち上げました。

これが絶対正しいとか、それ以外の方法は駄目だなどとはまったく思っていませんが、そういうふうに分かれています。

トランプの語りとエリザベス女王の語り

○松方 先ほどの「事実を話すか、事実と異なることを話すか」の話に戻りますが、先日、ヒューマンティーズセンターの別のオープンセミナー「トランプとこまいたち：ポストトゥルースの語用論」を拝聴したところ、トランプ元大統領の支持者はトランプの言っていることを事実だと思っているわけではなく、事実と異なっても彼の話を肯定することによって忠誠心を表しているのだ、という話が出ていました。

私が思うに、チャーチルやガーデンイーのように後世でも優れた政治家といわれる人たちと、トランプなどの否定的にとられがちな人の違いは、誰かを排除することで仲間内の結束力を高めようとするのではなく、できる限り普遍を目指し、仲間外れを出さないように語るということではないか。「包摂」といえばいいでしょうか。後藤さんが紹介されたエリザベス女王のスピーチもそうですね。

○後藤 時代や状況によって必要とされる語りは異なるということで紹介しましたが、エリザベス女王のスピーチは、おっしゃる通り、まさに「包摂」ですね。エリザベス女王は英語という言葉を使ってイギリス国民に語りかけましたが、インターネットのこの時代では、日本にいてもリアルタイムで見られる。非常に話題になったので、私の知人でも直後に見た人が何人もいて、そのスピーチに感動したという感想が多かったのです（私の知人ですので、もともとイギリスに興味のある人だった可能性も高いですが）。

あのスピーチはイギリス人に向けられたものかもしれないけれど、聴き手がイギリス人か否かとは関係なく、世界の多くの人たちに訴えかけるものがあつたのだと思います。排除することは全然考えていないですよ。

もし戦争中なら敵国人が想定されるわけですが、今回の敵はどこかの国の人ではなく、ウイルスです。ウイルスと戦うために人々がともに手を携え、力を合わせましようという呼びかけは、完全に包摂ですよ。

○松方 ご紹介くださったチャーチルの演説も、戦時だから敵はいるはずなのだけれど、たとえば「ドイツ野郎」みたいな表現はまったくしていませんよ。

○後藤 戦争だから相手がいないというわけではないけれど、スピーチのご紹介した部分では、国内外で誰かを排除するというのではなく、「私たち」はどうするのかということに焦点を絞っていますね。

イギリスの国歌は“God Save the Queen”ですが、それと並ぶような国民的な歌に“Rule Britannia”という歌があります。「ブリタニアよ、支配せよ」という愛国的な歌で、その歌自体には帝国支配と密接に絡んでいるという問題があるのですがそれはそれとして、歌詞の最後に「私たちは決して奴隷にはならない」というフレーズがあるのです。チャーチルの演説の「私たちは決して降伏しない」という表現は、やはりそういう、イギリス人であれば誰でも知っているフレーズにつながることでよりインパクトがあつたのかなと考えます。

縦軸と横軸から自由になる歴史学の語りとは？

○質問者9 僕は東京大学の1年で、今、駒場に通っています。この先の進路として歴史学を選ぶ可能性もあるので、今日何う話を参考にしたいと思っています。松方先生が冒頭で、縦軸・横軸にとらわれない歴史学を、というお話をされましたが、縦軸・横軸を使わずに歴史を認識することはできないようにも思っています。あのお話で意図していらっしやつたのがどういうことか、あらためて説明

していただけますか。

○松方 縦軸・横軸をまったく使わないというつもりではないのです。ですが、今、率直に言えば、歴史学は非常に行き詰まっています。打開するための模索も行われていて、例えば感情史や、グローバル・ヒストリーなどはあります。ただ、日本の歴史学の「実証」と言われているものはどうでしょうか。史料をしっかりと読んでそこから何かを生み出す実証研究の質は素晴らしく、非常に大きな蓄積がありますが、そこから引張り出してくる語りの硬直化は否めないように思います。

例えば、これまでの歴史学では「社会が発展していけばみんな豊かになる」と語ってきました。私が子どものころはそれをみんな信じていた。実感としてもそうだったし、このまま行けると思っていた。しかし今、「そういうわけでもなさそうだな」となって、歴史学としてどうしたらいいかわからなくなっている。

そこで新しい語りをどう作るかというときに、マトリクスの1点、たとえば、20世紀のインドについての研究、7世紀の日本についての研究には信頼を置けるという前提に立ち、それぞれを一つのピースとして、縦軸・横軸から自由になってつなぎ方を変えればいいのか。年表の後でお見せした私の描いた図は、そのつなぎ方の一つの提案です。

今の時期に歴史学を選ばれるのであれば茨の道になりますが、そういう方がいてくださるといのは我々にとって希望の星です⁶。

権力者による、差別を助長する発言を制限すべきか

○質問者10 トランプ氏の発言など権力者による差別を助長する発言が現代にも見られますが、そういった言説の制限には何が必要と考えますか。もしくは制限の必要はないのでしょうか。

○水野 松方先生が先ほど、前総長が東大の敵はYouTubeだと言ったという話をされていましたが、私もそう思います。すでに「中田敦彦のYouTube大学」というYouTubeチャンネルが大きな人気を博していますね（YouTuberはチャンネル名に「大学」と付けるのが好きなのでしょう）。

6 質問者への答えが不十分だったと思うので補足すると、これから歴史学を志す若い諸君には、まず「20世紀のインドの研究」や「7世紀の日本の研究」といった、自分の専門とする時代と地域を特定して、その時代と地域の史料を読めるようになってほしいと思う。それが、自分が歴史を考えるときによって立つ足場、陣地になるので、ぜひ必要である。しかし、たとえば、自分の専門がこの地域であるから、この地域の歴史を扱う研究者としか付き合わない、と決めてしまう必要はないだろう、と思う。自分の研究の位置づけは、いかようにもデザインできる。【松方】

しかし、YouTubeで個人がそれぞれに見たいものを見て、学びたいことを学ぶことができるというのはいいことである反面、容易にフィルターバブルに陥る危険もあると思います。

例えば、とある動画を見たのをきっかけに、YouTubeのレコメンド機能によって、視野が狭くなるような偏った動画ばかりがどんどんレコメンドされる。特に政治とか外交関係の動画にはその傾向が強いように感じられます。すべてのトランプ支持者やすべての〇〇支持者がそのバブルの中にいるとは言いませんが。

対照的に、大学には、いくつかの分野から一定の単位を取らないと卒業させない、といった「ディシプリンを強制する力」がある。もちろんすべての単位を取りさえすれば全員が公平な目でものを見られるわけではありませんが、何かしらの外部からの強制力を働かせるという役割も大学は担ってきたんじゃないかなと思います。

○井坂 特定の言説の発信に対する制限の是非、という点について、ガンディーの話に絞っていえば、彼の場合には様々な人々と対話しながら思考を深め、「真理」に近づいていくという考え方なので、彼自身はどのような言説であれ、その発信を法的に制限することはおそらく好まなかっただろうと思います。ガンディーは、どのような人でも内なるものの声に耳を澄ませば、何をすべきで何をすべきでないかがわかるはずだと、固く信じているところがあります。そうしたガンディーの考えは理想主義的にもみえるわけですが、しかしそんな彼の言動を今、改めて振り返ることは、とても面白いのではないかと個人的には思っています。

○後藤 イギリスの伝統からするとおそらく、イギリスは「制限はしない」という方向にいくと思います。やはりFreedom of speech（言論の自由）の制限になりますので。ガンディーの言うところの「対話」に当たるかもしれませんが、イギリスでは「議論」で戦うことをよしと考えているので、制限には反対する意見が圧倒的だろうと思います。

ただ、差別を助長する言説や、先ほどの松方さんの言葉で言えば、「包摂」の逆である「排除」へ向かう言説が非常に増えてきていることは多くの人が問題だと考えていますし、どうすべきか考えなければいけないと思っているでしょう。考えるだけでなく、そういった言説に積極的に反論しようとする人も多いと思います。

○水野 松方先生はいかがですか。

○松方 難しいですね。制限するべきだと思っているわけではないのですが、制限しないためには、包摂の側がかなり頑張らないといけないと思うのです。しかし、あまり頑張れていないのが現実だと思います。

例えばいわゆる嫌韓嫌中言説に対して、有効な反論はあまり出ていないと思いますが、どうでしょうか。大学という空間の中では、反論より「沈黙による無視」が多いのではないのでしょうか。

6、7年前、あるとき、ゼミの場で、ちょっと嫌韓嫌中の気配がある発言をする学生が1人いたんです。でも他の学生は遠巻きに見るような状態で黙っている。10人ほどだったと思います。

私はその学生さんに反論できるのですが、教員の私が反論したら1対11という構図になってしまうだろうと思って、黙って見ていました。すると、彼は他の人がネガティブに黙っているというのが感じられるから、一生懸命しゃべるわけです。結局、私はそれをうまく止められず、今も反省しているのですが、やはりこういうとき、「それはおかしいよね」とか、「こういう考え方もあるよ」と周りが話さないといけないと思うのです。おかしいと思いながら黙って見ていては駄目なのだ。

つまり、言論の自由を認めるためには、みんなが常に発言していないといけないのではないかと。ところが、話さなくてもわかり合える人たちの集団では、「当然、こうだよ」という常識を共有している。そこに同じ常識を共有していない人が来ると、普段話し慣れていないから、みんな黙ってしまうわけです。対話にならない。そこは問題だろうと思います。

ヘイトスピーチに対しても嫌韓嫌中の発言に対してもトランプ的な発言に対しても同じで、普段から「それは違う」という議論をしていないから対話もできない、ということではないのでしょうか。

しかし、普段から議論することに慣れるためには時間が必要で、時間を稼ぎ出すお金が必要だろうと思います。忙しく働いて毎日バタッと寝るという生活では議論なんてやっていられない。この蓄積された富があるかないかの違いかなという感じはします。

さて、まだお答えしていない質問があるのに申し訳ない限りですが、終了予定時間をだいぶ過ぎてしまいましたので、ここで締めくくらせていただきます。いろいろな質問を頂き、議論も深まったかと思います。初めての企画で議論の方向性を練ることができず、至らぬ点が多かったと思いますが、ご批判も含めてありがたく頂きました。本日はどうもありがとうございました。